

「平和の神が共にいます」

箴言
ピリピ人への手紙

第4章4節～9節
第4章8節～9節

説教 岡村 恒牧師

「そうすれば、平和の神が、あなたがたと共にいますであろう」(9節)。ピリピ人への手紙は「喜んで歩む」ことを描いてきましたが、最後の結びの部分に挿入されたかのように、今日の8節と9節が入れています。先ほど、旧約聖書の箴言4章の一部を朗読しましたが、この箴言の言葉を受け取るようにして今日の御言葉が書かれているように思います。

「すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること」(8節)、これに続くようにして、「また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい」と言います。これらは聖霊が与えて下さるものであり、人間が生み出すものではありません。どれも神に属する言葉です。ここに描かれている6つの徳目は、いずれも、神がどういうお方を言い表しながら、私たちがどれほど神から離れた存在かを明らかにしています。しかし聖書は、これらのものを心に留めよ、と言うのです。どういうことでしょうか。求めて、何とかして手に入れる、そういう話でしょうか。あなた自身が真実で尊ぶべき存在になり、正義を手にし、ピュア(純真)であって、愛に溢れ、人々からも神からも誉れある者と呼ばれるそういう存在になりなさい、と言うのでしょうか。もしそれが条件で、平和の神が共にいてくださるといのがその結果であるとしたら、私たちは誰一人、この条件を満たすことはできません。神にのみ属するものを、私たち人間が身につけることなどあり得ないのです。

イエス・キリストは神と等しいお方でありながら、むなしくなって人間と等しくなられました(ピリピ人への手紙 第2章6節～11節)。まさに私たちが、神と共に歩むことができない存在だからです。主イエスご自身が、私たちの所まで降って、低くなって下さいました。私たちに代わって、神との決定的な断絶を味わうだけでなく、十字架で死んで最も低い場所にまで降り、その命まで与え尽くして下さいました。それは、神に到底近づけない私たちが、神と共に生きるようになるためです。神のひとり子である主イエスが、私たちに代わって死んでくださった以上、私たちは平和の神と共に生きることができる。神のものとして、神の命を味わいながら生きることができる。聖書はそう断言します。

「わたしから学んだこと、受けたこと、聞いたこと、見たことは、これを実行しなさい」(9節)。ただ手紙を読んで言葉を聞くだけでなく、実際にパウロの生き様、祈りの生活を見、パウロが今、明日をも知れぬ場所で喜んで生きている姿を見聞きしながら、パウロに与えられている信仰を受け取る、という話です。そしてそれはとりもなおさず、パウロが做った方に倣う、という話です。イエス・キリストに倣って生きる。あなたがたも、私のように主イエス・キリストに従って歩んだら良い。そうすれば、本当なら私たちに何ひとつ関わりの無い神の恵みが、私たちに与えられる。真実なもの、尊ぶべきこと、正しいこと、純真なこと、愛すべきこと、ほまれあること、これら一切が神の賜物として私たちに与えられる。空っぽの私たちに神の愛が注ぎ入れられ、やがて終わりの日、栄光の冠を頭にいただくようになる。私たちが手に入れることのできないものを、神がイエス・キリストの命を代償にして与えてくださる。いや、もう既にそれを約束し、差し出し、与えてくださっている、と語るのです。

この8節と9節は、私たちが何故、この地上にありながら、もしかしたら獄に囚われているような明日をも知れぬ身でありながらもなお、喜びをもって歩むことができるかを明らかにしています。主イエス・キリストを信じ、主に結びつけられて歩む時、何か漠然とした神の平安が私たちを守る、という話から更に踏み込んで、平和の神御自身が私たちと共にいる、そこまで聖書は約束します。恐るべきことです。全地を造り、ひとりひとりの命を造り、髪の毛一筋まで知り尽くしておられ、私たちの魂の奥底までご存知の神が、本当の平和を与え、平安を与え、慰めを与える御方として私たちと共に歩んでくださるのです。

この約束は確実です。何があっても変わる事のない、確かな約束です。たとえこの世界が終わりを迎えても、神の約束は微動だにしません。新しい天と新しい地が到来し、そこで神の約束の確かさを、神の平和がどれほど完全な、豊かな、確かな平和かを私たちは味わい知ることになります。ですから聖書は、神を信じ、神の約束を信じて、平和の神と共に本当の安息を得て喜んで歩んだら良い、と私たちに信仰の喜びの中に招くのです。

(記 説教要約奉仕者)